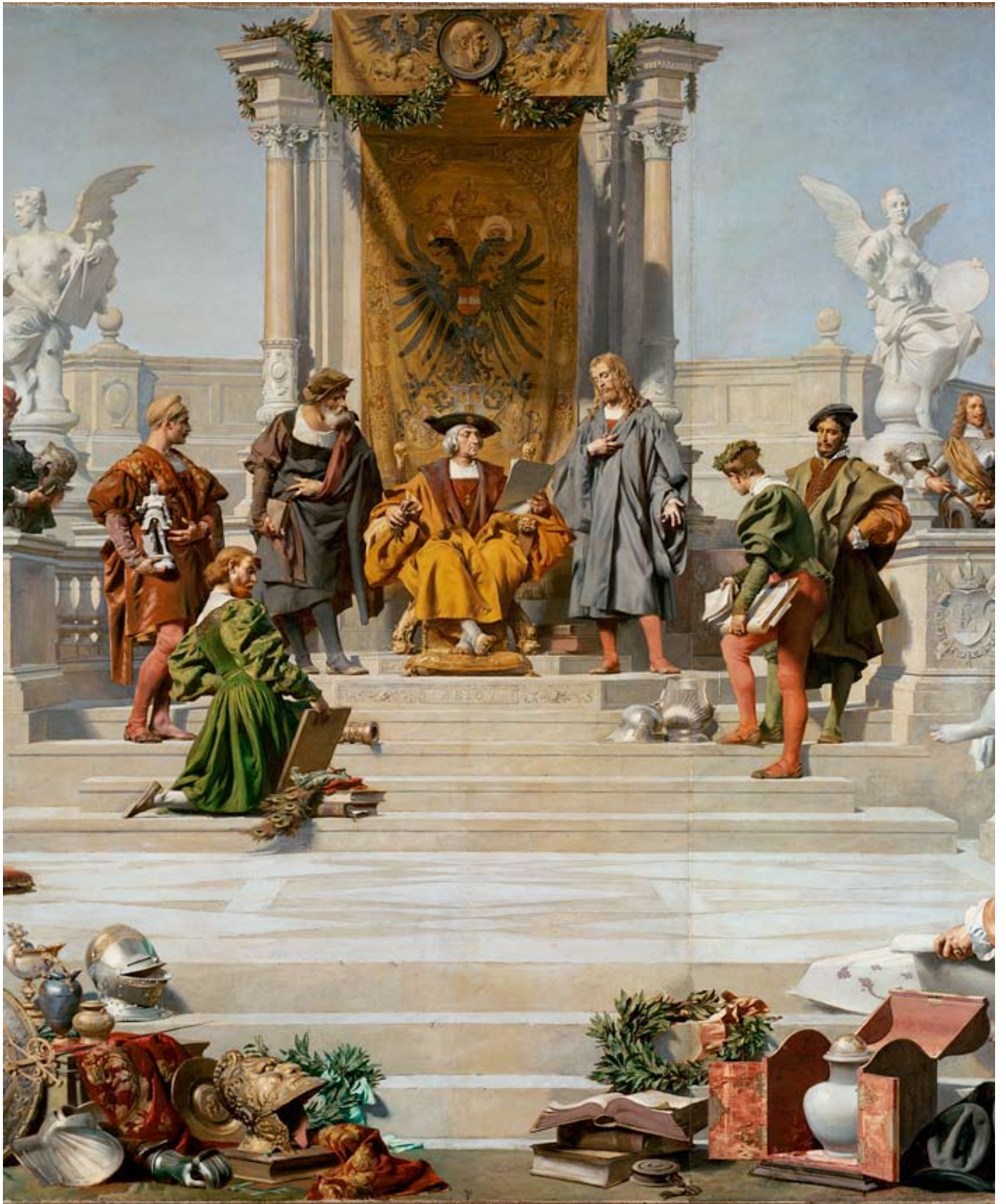


月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊28年日
創刊1989年 Nr.328

GEKKAN-WIEN 2016年11月号



Julius Victor Berger Die Mäzene des Hauses Habsburg, Detail Deckengemälde in Saal XIX 1892 Öl auf Leinwand signiert JUL.BERGER. (c)KHM-Museumsverband

ウィーン美術史博物館創立 125 年記念展『ユリウス・ヴィクトル・ベルガーとハプスブルク家のメセナ』 XIX ホールの天井画



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 61



2016 Jun 21, 2017
杉本純

筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エッセント教育院は、グローバルな原子力危機分野において国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的とした修士・博士二貫学位プログラムである。本院の活動の二環として、国内外において実習・研修を実施している。九月十日〜三日にかけて欧州研修を実施した。参加学生は、修士課程一年の学生一名(日本人)、中国出身各二名、修士課程二年の学生五名(日本人一名、フィリピン、南アフリカ、マレーシア出身各一名)の計七名、院長と筆者らスタッフ四名が引率者として同行した。訪問先はリトアニア、オーストリア、スイス三ヶ国の大学、研究所、国際機関、大使館等である。



カウナス工科大学

www.dojo.titech.ac.jp

リトアニアのカウナス工科大学では原子力分野の国際協力とテロ対策をテーマとして、先方の学生たちとグループ討論・発表を丸日行った。カウナスでは杉原千畝記念館も訪問したの印象深い。在リトアニア日本大使館では、ビザギナス原子力発電所建設計画を含む広い範囲の両国の協力について大使から直接話を聞いた。ウィーンでは、国際原子力機関と包括的核実験禁止条約機関準備委員会

並びに在ウィーン国際機関日本政府代表部を訪問し、国際的な場での仕事を学ぶ機会を得た。また、国立歌劇場でワーグナーのオペラを鑑賞し、欧州の伝統文化を知ったのは得がたい体験である。スイスでは、放射性廃棄物の地層処分に関する研究施設を二ヶ所訪問することにより、八月に訪問した幌延の同様な施設との違いについて理解を深めた。学生たちは、滞在中の討論や訪問を通して、数多くの質問や意見を述べること、積極的に発言することができたと思う。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の居酒屋について述べてみたい。ウィーンの居酒屋と言えばホイリゲが有名である。自家製ワインと簡単な食事を提供するホイリゲは、十七世紀後半、トルコとの戦争でウィーン市内ではワインを入手しにくくなったため、人々が郊外の農家に自家製ワインを買い出しに行くようになったのが始まりと言われている。一七八四年にヨーゼフ二世がウィーンの農家にワインの販売許可を発令して以来、その年の新酒を販売するようになった。新酒ができるのと店の軒先にモミなどの木の枝を束ねたものが出るされる。これは、日本の造り酒屋で新酒の時期に軒先に吊す杉玉を彷彿させる。ホイリゲで有名な町はクリンツィングなどウィーンの郊外九カ所ほどに点在しており、店によってはウィーンの民俗音楽の演奏が楽しめる。

一方、我が国の居酒屋は奈良時代に遡り、京都も平安時代には居酒屋があったという。現在の居酒屋は、江戸時代の煮売り屋や角打ち(立ち飲み屋)の発展形である。京都の居酒屋は美に数多く多彩であるが、老舗や

名店がいくつもある。千本中立売にある昭和九年創業の「神馬」は、日本の居酒屋と呼び声が高い。歴史ある名店まで良い食材を揃えている。一条山端の「赤垣屋」は、昭和九年の創業、赤いネオン提灯が自印である。冬場はおでんがおすすぬ。先斗町歌舞練場近の「ほつりや」はカウンスターだけが、おぼんざいとおでんがおすすぬ。NHKで紹介されたことがあり、女将がおぼんざいに関する本を出版している。両市の居酒屋は地元と観光客を愛されていることが伺える。

余談であるが、筆者がウィーン赴任時には日本からの訪問者をホイリゲに案内したり、家族や仲間とも食事を楽しんだ。今回も国際機関に勤める日本人と学生たちの懇談会をヘートベンが時任さんでいたホイリゲで開催した。京都では早大入学生後に先輩に「赤垣屋」に連れて行ってもらった。現在も「ほつりや」をよく利用している。両市の居酒屋を紹介できた幸運に感謝しつつ、上記ホイリゲの写真を掲載させていただきます。



■杉本純 東工大特任教授 前京大教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■